

都市地域形成の世界史的系列における日本の特質

山口 恵 一 郎

一、都市の原初的特質と都市地域・都市時代

都市は人間生活の中枢的展開舞台である あらゆる地表は、大きくみて、文化的な事象と自然的な事象、あるいは都市的な事象と農村的な事象との二つの要素から構成される。この都市的事象と農村的な事象とは、本質的にはともに併立して同地位を占居するものであって、一方が他方のうえに君臨するという意味のものでもちろんない。にもかかわらず、都市がその空間的陰影を鮮明にしているゆえんは、ほかでもなく、人類の歴史を通じて、古往今来、文化の代表者たる役割をはたしているからである。都市の文化的な、機能的ななやかさ、これが都市を、それはそれでもちろん意味はあるにしても、見かけ上の顕著な存在たらしめているのである。

地域形成のうえで、都市の機能と農村的機能とのいずれが主体をなすかというようなことは、もとよりいふも愚かなことといわざるをえないが、都市は高次元の文化的結集という点で、地域形成に主導的な役割をはたしていることに誤りはない。しかしながら、歴史の流れは、都市が地域形成に主導的な役割をより大きくはたす地域と時代、比較的その役割の小さい地域と時代とがあることを示しており、この点に着眼すれば、この起伏の高い地域と時代は、いふならば都市地域あるいは都市時代ともいふべき表現が可能である。⁽¹⁾しかも、この都市地域あるいは都市時代なるも

の特質は、当然、その地域あるいはその時代における都市の性格によって相違がある。いま、横にひろがる都市地域を、縦につらなる都市時代の断面に沿って眺めることにより、日本の地域形成における特異性を巨視的に考えてみたい。

都市の歴史は人類文化のあけぼのとはじまる 世界史的にみると、おもしろいことに、素朴な文化の時代におけるほど、都市は地域形成の立役者であった。このことは、なによりもまず、都市の意義を発生的に高く評価せしめる十分な理由を与える。すくなくとも、都市への関心を人間の遠いふるさとにまでさかのぼって求めなければならぬという宿命的な動機でさえある。

衆知のごとく、いわゆる古代文明の開花までに、考古学的文化から引きつぎきたった定着農耕社会の成立はあったにしても、それが都市社会への移行は、自然的ではなく、きわめて意志的であったといえる。つまり都市の歴史は、人類が一定の秩序にむかって思惟し、人間のより複雑化した活動を目的的に開始したときからはじまる。もとより、農村の形成にさいしても同様のことがいえるが、それはまだ多分に無為的であった。いわんや、人間が放浪し採集し自然のままに生活していた間は、ときに移動性集落をつくることはあっても、都市とよばれる地域社会をつくることはなかった。定着し、創造し、多分に意図的な相互の交渉を必要とするようになって、はじめて都市が誕生したのである。

集落は発生的にはすなわち「ムラ」であって、密ないし疎に「群がる」ことが前提であるが、その場合、機械的に無意であつてもよいはずである。実際には「ムラガル」こと自体がすでにまったく無意であるわけではなく、ムラガルことの必然性はあるにしても、それはまだ低次元の段階にとどまっている。つまり「ムラガル」こと自体は、目的

または有意性を具体的にもつ以前においても成りたつ。したがって、こうした有意性以前の集落があったとしても、それは村落としてしか存立しない。

これにたいして、都市は最初から具体的な意図をもつ。この「意図」なるものは、それぞれの時代、それぞれの地域に固有な内容を表現するものであって、歴史的形成体であると同時に地域的な形成体でもある都市の、本質を構成するものである。都市形成の地域的性格におけるヨーロッパ的系列とアジア的系列のなかで、日本の都市形成の位置づけとその特質の解明を求めめるためには、世界史の舞台において、それぞれの地域を形成した「具体的な意図」を知る必要がある。

しかしながら、いかなる文明の曙光期においても、都市は人類の定着、創造にもとづく必然の生成体であるというわけではない。つまり都市は、人間が生活の基礎を一定の大地のうえに置くようになってから、必要に応じて創られてきたものであること、必要がなければもちろん創られることはないということである。そして必要であるか否かは、その人間民族の文化段階ないし文化の素質によって決まる。したがって、都市の濫觴は人類文化の黎明と期を同じうしてみられるところもあり、また一方、長い村落共同体の体制のまま、地域形成の主導力としての都市機能の発生をおくらせたところもある。オリエントは前者の地域の典型であり、日本は後者の性格のつよい地域である。

二、日本における都市地域成立の三つの時期⁽²⁾

その日本的な分類 都市が地域形成の主導力をなすウエイトの高い時代を、とくに都市時代とすれば、日本におけるこうした都市時代の主流は、それを現出せしめる要因を段階史的に類型づけることにより、次のような三時期にわ

かつことができる。

(1) 政治の中心—物資の集散（流通、交易）—商業の発達という一連の条件にもとづく都市時代

(2) 工業化による都市時代

(3) 第三次産業と現代的経営部門を主要因とする都市化による都市時代

日本古代都市の性格 日本の第一の都市時代は、厳密にみれば、近世封建都市の成立によつてもたらされる。もとより、これ以前に都市が発達しなかつたということではなく、これをさかのぼるはるか以前に、中世都市、古代都市などが存在したことは歴史にみられるとおりである。しかし、日本においてしばしば古代都市の範疇に入れられる平城京や平安京なども、中国中世都市の国風化的模倣による計画政治都市であつて、その成立は八世紀初頭ならびに末期であり、けつして早い時代のことではない。なるほど、その都城的性格はたしかに古代を表徴する。この性格は、平城、平安兩京以前またはその途次に建てられた都（3）からひきつづくもので、これら一連の都市（らしきもの）を日本の古代都市と称するのは、いちおう当を得ているにしても、平城京、平安京成立は、規模の大きさといひ、都市設計の構図といひ、国家意識のうえに立つ首都感覚といひ、まさに中世初頭の時代的背景を考えないで説明することは困難である。この意味で、平城、平安兩京は都市的には古代の残影ではあるが、日本の中世都市の初期のタイプを示すものとみてよい。

いわゆる日本の古代および中世への漸進期において、地方における都市的なものの存在は、現在のところきわめて影がうすいとみられる。農村的色彩の濃い「都市的なもの」が発達したことは考えられようが、地方の中心地を形成した国府の所在地にしてさえも、本質的には農村であつて、都市的要素を多少ながらもつてはいても、これを都市と

はいがたいように思われる。まして郡衙の所在地にいたってはなおさらのことであつたらう。平城京、平安京の成立にいたつて、はじめて日本の都市の論述がはじまるという事情は、すくなくとも日本にあつては、都市の古代地域形成にたいするウェイトを高く評価することを阻むことになりそうである。

中世日本の地域形成における都市の意義 古代末、中世初期において、こうした残影的古代都市と国府の所在地との間には、その集落機構に以上のような大きな懸隔があつた。そこには中央政治都市だけが際立つた存在をなし、それにつづく都市の發達がみられなかつた。つまり都市層がきわめて薄かつたということで、これは地域形成の主軸が農村にあつたことを示す。

平安時代も降るにつれて、ようやく交易都市の發達がみられ、これが地方にあつて地域形成の布石を投じうるようになる。ここではすでにまったく古代は影をひそめ、中世が形成される。鎌倉から戦国にいたる時代を通じて、中世都市はその数を増し、機構的に複雑化していく過程を経るが、この間の大きな特質は、地方軍事拠点を主軸とする地域形成の傾向がかなり濃厚となつたことである。にもかかわらず、武士は平時においては農民であり、商業の發達も農業機構の余剰としての形態をつよくもつていて、農村とのつながりにおいて成りたつてゐる、などのことから、中世都市はやはり地域形成の主力とはなりえなかつた。すなわち、中世における地域は第一義的に農村經濟機構のうえに成りたつものといえるが、しかし特定の都市がはたした役割は注目さるべきである。

中世日本都市の性格 中世都市の一特色としてあらわれた荘園集落や館集落や環濠集落は、いうまでもなく守護、地頭や地方豪族などの拠点として形成されたが、これらは、ローカルではあるが島津領の「麓」集落にその典型をみるような、一種の屯田兵村的傾向をとつて發達しつゝあつた。//根子屋// 堀之内//などの集落も、多かれすくなか

れ、かような性質のものではなかつたかと思われる。したがって、地方行政の中心という機能にたいする商業の集積はもとよりあつたにしても、それは国府集落の機能形成とさして変らなかつたといえる。

地方の経済的中心たる機能をようやくにしてもちうるようになるのは、実に一五世紀の中葉、応仁の乱（一四六七—一四七七年）を契機として、とくに顕著となつた中世城下町の成立以来であつた。しかしそれにしても、戦国の政情不安は都市の定着成長にたいして、けつして十分な成果をもたらさなかつた。この事情は、近世城下町が地方の中心核として定着発達し、地域形成の主役を演じたのと規を一にして語ることはできない。この時代の経済的発達は、このような地方行政の中心地を都市的系列にとくに含めることなく、首都たる京都あるいは鎌倉を別として、宗教の興隆を背景とする門前町や寺内町、それらを媒介とする市場町を勃興せしめたことに特色がある。この種の都市は、地方に散在したではあろうけれども、中世の比較的初期の特徴を構成するものといふべく、この点で中世の都市系列の発生をこれらに求めるのは妥当である。

しかし、それよりもさらに重要なのは、対外交易を軸として形成された臨海港町である。この種のものには、堺、博多、安濃津、坊津などや重要交通路線であつた瀬戸内に発達した港町が挙げられるが、これらのうちのあるものは一個の独立的な強力な商業勢力の結成がみられた。その最も典型的なものは、しばしば指摘されるように、ヨーロッパ中世の自由都市に類似した一種の自由都市的な社会を形成した堺である。

例外的ヨーロッパ都市萌芽としての堺の成立 堺は南朝成立を機として、吉野の外港たる機能をもって勃興したが、その都市的基盤は水産物を媒介とした座商の確立にあり、しかもその繁盛は瀬戸内の商業と交通とを掌握することにあつた。堺が博多、天王寺などとともに、京都につぐ数すくない当時の大都市であつたことは、「堺一万軒」と

称され、人口五万以上と推定されることによってあきらかである。

しかしいくばくもなくして、応永の乱（一三九九年）の戦火に遭い、堺は灰燼に帰したが、瀬戸内水運を軸とする広い商圏と資本の蓄積が復興をはやめた。その場合、地下請による納租制度は自治独立の自由都市的形態への萌芽となったと考えられるが、戦国権力者間の抗争にまきこまれて、地下請の永続を保ちえなかつたことは、市民意識の醸成、自由都市完成をもたらさなかつた理由のひとつである。

かくのごとく、一五世紀頃の堺にみるような交易都市の隆盛は、中世都市の最も特徴とするところであり、都市が地域に与える影響はかなり強まっている。このことは、すくなくとも西日本にあっては、この種の都市を主軸とする地域形成の段階にあつたとみるべきことを示しており、東日本との間に都市発達段階の差を認める十分な意義をもつ。

近世都市の地域形成 さりながら、地域形成において堺が果たしたような役割は、全国的視野に立つてみればなお局部的であり、その時代の全般的風潮をなすものではない。満足的な線でこうした風潮の形成をみるならば、それは一七世紀以降近世封建制の確立まで待たなければならぬ。江戸期の幕藩領国の体制が、鎖国の制とあいまって、城下町をして結集的な都市機能地域に結実させ、各領域の中核たらしめた背景には、内国交易を対象とする港町が城下町の外港として成立し、宿場が城下町を結んで、都市ネットはしだいに整備されたという事情がある。地域的統一体としての凝固は、こうした都市網の拡大整備によって進展したわけであるが、この過程でもやはり村落共同体の基盤のうえに載っているにはちがいないとしても、村落地域のなかにそれだけ都市が強力な根を植えつけてきたしだいを示している。

近世封建都市の地域形成は、いふなれば商業革命 (Commercial revolution) にもとづくもので、近代都市成立の主要因となった産業革命 (Industrial revolution) 後の工業化にもとづく類型 (段階) と好対照をなすものといえる。要するに、(2)の時期以前における都市時代の骨子は、城下町その他における商業資本の育成と定着、それによって生じた町人階層、兵農分離からきたところのまったく非生産的な武士などの消費階級の集積によって成立した都市が地域の主体となったことである。この都市の及ぼす影響力の大きさに着目して、これを日本的視野における『第一の都市時代』とよぶことにする。

産業革命の浸透による近代都市への脱皮 明治以降、日本の近代都市形成の主軸をなしたのは、なによりもまず工業であった。しかし、農村経済の拡充期であった明治前期の都市ならびにその地域形成上の役割は、世界経済の浸透にたいする反応を徐々に示しつつあったとはいえ、大きくみれば近世封建制下の継続であり、同時に近代都市の揺籃期でもあった。⁽⁵⁾

工業を主軸とする都市化は、明治中期以後産業革命の進行につれて、しだいに歩調をたかめた性格のものであり、この結果のひとつの形態として形成された工業地帯は、地域形成の主力というよりも、むしろそのものとさえいいうるようになった。今日にいたるまでに、工業化の地域格差は地方都市の性格に差をもたらし、これはさらに地域の性格に大きく差をつけたのである。地域形成において都市のはたす役割が、この時代ほど顕著であったことはかつてなかった。これ『第二の都市時代』たるゆえんである。

現代の地域形成における都市の諸問題と都市の発達段階⁽⁶⁾ 第二の都市時代の出現は、二〇世紀の前半を覆って日本の地域形成の最大の特質を醸成したが、その後半においてこの事情はやや複雑化された。近代化のうけいれ方の相違

によつて都市の発達段階の差を増大した結果、国家都市的大都市と地方中核都市、地方的第二次核小都市などの明確な区分が、たがいに関連しながら、それぞれの基盤によつて地域形成の中核をなすという構造が成立することになつた。国家的巨大都市は政治、文化、経済の管理部門的第三次産業を直接の動機として、工業自体はそのウェイトを弱め、地方中核都市は府県（またはそれに準ずる）単位の地域の中核として、巨大都市の代行的機能と地域形成の第一次核としての行政的機能とを併有する。このように、後者において工業を第一の要因とする段階よりも、むしろ国家都市の相似型といひうる傾向がみられはじめたことは、都市の現代的意義を求める際のひとつの関心事である。

今日、地域形成の主軸は広域圏都市の形成とおきかえられてもよいほど、都市の主導的地位がたかめられているが、この広域圏都市の内部構造を分担するものは、ほかならぬ地方的第二次核小都市であつて、古くから村落共同体の組織のうえに立つて存立してきたこれら多数の、いわゆる地方町の、今日におけるレーゾンデートルは実にここに見出されることを強調しなければならぬ。地方第二次核とは、つまり地方的中心核をとりまく衛星核であつて、今日工業化を強く推進すべきは実はこの種のものである。いいかえれば、これは第二の都市時代の段階にまでいたらないものといふべく、以上のような各段階のからみあつた複雑な地域形成を示す時代、すなわち、第二次世界大戦後とくに二〇世紀後半のはじまつた頃からの現代を「第三の都市時代」と称するのである。

都市時代とは、ただに都市の興隆、人口の急激な都市集中というようなことだけではなく、地域の内部構造を都市がどの程度、どのように規定しているかを眼目としてみるべき概念である。いま、日本の都市地域⁽⁷⁾成立における三期を概観したが、次にこうした日本の系列のアジア的系列における地位、ならびにヨーロッパ的系列との関係を考へてみたい。

三、都市地域形成のアジア系列とヨーロッパ系列

都市革命に誘引された古代文明社会の地域形成　いわゆる文明の発祥地と称される古代文化圏において、都市のはたした役割は大きかった。これらの文化圏のうち多くの地域では、原始的氏族制共同体における血縁的結合が氏族連合よりなる地縁的結合に変質する場合に、古代人にとって絶対の神を中心として団結することのできる強力な拠点をつくる必要から、最初は素朴単純な社会であったが、村落とはことなつた共同体を構成した。はやいところでは、すでにオリエントにおいて、メソポタミアやエジプトのように、紀元前五〇〇〇年の頃からその機構があらわれており、これが都市の発芽となつたのである。発生的分野に立つてみれば、古代地域にあつては、村落と都市とはまったく立場を異にしてそれぞれ独自に発足したか、あるいは村落から都市への過程においても、その間の連鎖は多分に没交渉でしかなかつた。

しかるに、こうした都市、農村の没交渉的発生にもかかわらず、古代都市は農耕文化のうえに成立した。都市なるものが神の場、権力の表示という目的の意図によつて特別につくられ、特別の地位を与えられたものであるにせよ、多数の人口を養うためには、依然として農耕に頼らざるをえない。氏族制社会のかれらの単位共同体は、その領域がきわめて狭いにもかかわらず、自給体制の確保をかれら自身の土地に依存しなければならなかつた。かくて、都市は農耕文化のうえにつくられ、そしてそのうえに成立したのである。しかしながら、都市の居住者は農民をもつて構成されたのではなく、なによりもまず支配階級と、そしてしだいに地位をたかめてきたところの、都市なるがための機能すなわち商業、交易を業とする人々によつて成立した。これは一方において、たとえばフェニキアにおける通商

の隆盛が遊牧民を基盤とする中継商業都市を後背地としたような、地域形成をもつたのである。

古代文化圏を培った都市の領域は、城郭をもつ中心市街地と周縁の耕地を含み、それはそのまま国家を形成した。そして国家は祀りの理念によって統禦され、権力および武力によって維持される。都市国家が、古代ギリシアにみられるような、アクロポリス、メガロン、城壁などを特色とする市街の形態を示すのは、すべてここに胚胎する。かような都市は国家と同意義であり、したがって神または権力そのもののシンボルであり、さらに一方において文化の精華であった。むしろ都市は古代人のすべてであったかもしれない。古代文化を都市文化と称し、古代社会成立の過程をしばしば「都市革命」とよぶのも、まことに当を得たことといわなければならない。世界史的観点からみたら、まさに「第一の都市時代」である。

オリエント＝乾燥的都市系列　ヨーロッパ文化の源流となった古代オリエント、ギリシア、ローマ、地中海世界において、都市国家による地域形成をとつたこと、すなわち古代にあって第一の都市時代と称すべき時代を、このような都市国家の構成において出現せしめたことは、オリエントつまり西アジアの都市地域系列の特色である。このオリエント系列は、中世都市地域の展開にあたって、地中海＝南ヨーロッパの系列にひきつがれ、北ヨーロッパ系列と対立する。アジアの西方にみられるこのタイプが、東方においてもみられたかどうかは、なお疑問を含むところであろうが、春秋戦国以降しばしばいくたの小国家（封建諸侯）が乱立するのは、村落集団のうえに立った一種の都市国家的共同体盛衰の歴史であったとみられる。おそらくは、中国における社稷の概念も、つまりは、こうした古代社会の都市国家化を示すものにほかならない。

概していえば、乾燥ないし半乾燥文化の通有性とみられるオリエントタイプの都市系列は、時と処を異にして他に

求められる。たとえば、しばしば東洋史上西域諸国として登場する中央アジアの乾燥オアシス都市国家や、文化的年齢の若いアメリカ大陸のアズテック、インカなどのアンデス⁽¹⁰⁾インディオ文化圏の成立がそうである。このように、オリエント、エジプト、黄河、地中海、またはヴェーダ以前のインダス文明から、アンデスにいたる乾燥地域の都市成立の過程は、すくなくともひとつの都市地域としての類型をもつものである。

しかしながら、都市国家の祭政一致が、あるいはアジアの東西において規を一にしたことはあっても、都市という地縁的な結合意識の点では、両者の間に相当のひらきがあったと考えられる。このひらきは、オリエントを継承したギリシアの都市がアレキサンダーの遠征(前三三三年)によって変質するとともに、軍事基地的都市の数を増加し⁽¹¹⁾、さらにローマへひきつがれて自治体的な性格を強めたことによって顕著となった。日本では、ようやく氏の連合体国家の成立をみ、しだいに氏族集団から村落集団への移行をみつつあった頃である。

モンソーンアジアⅡ湿潤的都市系列 古代文明の地域形成におけるかような一連の系列にもかかわらず、中国ではその後のヨーロッパがとつた自由都市化への方向とは逆に、ちょうど日本的なタイプに閉塞するに終つたようである。鎮とよばれる多くの集落が農村共同体の核として存在することは、日本の事情とよく似ている。さらにこの事情は、インドにおいて、アーリアン侵入(前二〇世紀頃)後、ガンジス流域へ移り(前一〇世紀頃)、都市国家を設立した(前九世紀頃)にもかかわらず、その後村落共同体の地域形成に移行したのとおなじである。これらの地域では、都市は原初的な農村経済のもとで発達したのであり、いふなればモンソーンアジアの都市系列をかたちづくるものといえる。

古代都市系列の中世的変質

古代の没落とともに、都市の地域形成に占める地位は後退する。しかし都市の中世的

変質はなおその活躍舞台に特異な姿相を展開している。いまや商業的基盤のうえに築かれた固い結束は、都市の内部構造の核となり、古代世界から中世世界への拡大とともに、とくに湿潤地域のなかに点々と立地するにいたった。乾燥アジアでは、オアシス都市は遊牧文化の中継商業交易都市として古代からの一ジャンルをますます固め、むしろ古代の継承と思えるが、他方湿潤地域では、地中海からヨーロッパへの拡大がヨーロッパ封建制の都市時代（当時の古い都市）を誘引し、さらに、そのとくに顕著な北西ヨーロッパでも、その色彩のうすい南ヨーロッパでも、十字軍以降の商業の勃興が都市の興隆（すなわち新しい中世都市）をもたらし、都市同盟への関心がたかまる。

日本の都市発達過程における独自性 この頃、日本ではようやく都市的展開の曙光がきざし、その成立の過程を明確にしつつあった。すなわち中世である。この点では、日本の都市系列は時期的にはるかにはいるがオリエントではなく、むしろヨーロッパに近いように見受けられる。この場合注意すべきは、ここにいるヨーロッパとは、オリエント——地中海的ヨーロッパ（南ヨーロッパ）およびこの系統の継承であろうかビザンツのスラヴのヨーロッパ（東ヨーロッパ）ではなく、ゲルマン的ヨーロッパ（北西ヨーロッパ）を意味する。逆にいえば、これは北西ヨーロッパのモンsoonアジアへの類同性を示すが、この類同性は中世自由都市の成立によってまったく破られ、両者は完全に異質の系列のものとなった。すなわち、この時代の最大の特質は、政治的独立体として顕著な存在を示した一種の都市国家的な共同体つまり自由都市が、ヨーロッパに発達し、アジアに普遍的な発達をみなかったことである。まことにこの点では、日本の都市系列はごく自然にアジア的であった。かように以上の諸点を総合的に考えてみると、日本の都市は、その地域形成の役割において、文明社会の通例性を破る特殊な構図を示したといえる。

中近世ヨーロッパ地域形成における都市の二系列 商業資本とギルド制を経済的基盤とする自由都市の成立は、都

市ならびに農村におけるマニユファクチアの發達を媒介として地域形成を推進し、やがて商業資本の産業資本への転化が、産業革命の展開へ進展する過程をたどる。そこには、産業革命以前にすでに工業生産が繁榮し、前資本主義社会に多くの都市が發達した。この性格は北西ヨーロッパのとくに顕著な特徴であり、産業革命後に成立した今日のヨーロッパ工業ベルトの骨子をいちはやくつくりあげたゆえんである。

これにたいして、地中海ヨーロッパにおける自由都市の基盤は、古代からの伝統的中継商業の拡大であり、したがってここではこれを主軸とする地域形成を表現する。ルネサンスの理念は古きにあつて、前向きの姿勢ではなかつたし、中世から近世への移行は、實質的にはイタリア文芸復興の開花よりだいぶおくれた。いきおい、産業革命もはるかにおくれており、都市化の主要な要因としての工業的要素の影はうすい。このように、ヨーロッパの二つの都市系列は、ともに商業を要因としながらも、そのバックを構成する要素を異にし、これが産業革命によつてもたらされた工業化を主軸とする都市化時代の出現を、時期的にことならしめることになる。

さらに、絶対主義的統一國家の成立が、首都形成の完成をもたらす反面、全般的都市形成にたいするブレーキとなつたことは、首都以外、都市の地域形成における主導的地位の相対的低下を示す。ことに、自由都市の發達のいちじるしかつたドイツやイタリアでは中央集権國家の成立がおくれ、近世都市の沈潜期を迎える。かかる自由都市の前資本主義的發展からの近世的沈潜は、産業革命を機とする資本主義的發展まで恢復せず、これまた都市形成の地域差に影響を及ぼしている。

植民都市の地域形成の開始

史上「地理上の發見」と称せられる世界の拡大以降、やがて植民地競争の時代を迎えて、近代的植民都市のジャンルが明確化される。植民都市は、古代地中海世界におけるその性格から、中世ならび

に近世の、いわゆる新大陸や旧大陸の後進地域におけるその性格へと、基幹的には軍事基地としての性格を保持しつつも、絶対専制主義を背景とする強大な権力をもつ植民地の経済中継基地として成立するようになる。これは固有の地域形成のなかに浸潤する外来文化による地域形成の開始を意味する。そしてモンスーンアジア、オセアニア、あるいはラテンアメリカにおけるなど、植民都市が地域形成にはたした役割は、それぞれにことなっていた。

産業革命、交通革命以後の開発史にあらわれる植民都市の系列は、中近世的植民都市の最大の特質である港湾中継基地たる性格からしだいに変質し、資本主義、地域によっては社会主義体制のもとに、鉄道開拓基地、農業開発拠点、鉱山都市とかの各種計画的開発都市が主力となる近代的な地域形成に移っていく。アングロアメリカやオーストラリア、またはシベリア、あるいは北海道などでは、この傾向による都市を中心とする地域形成をとった好例である。

産業革命後の地域形成に主役をなす近代都市 一八世紀後半期イギリスにおいてはじまった産業革命を契機とする産業資本の育成によって、近代都市が誕生する。中近世都市が商業革命の所産であるとすれば、これは工業ならびに交通革命の所産であり、領邦的、商圏的地域形成にかざられていた従来の範疇に、工業地帯のような新しい地域形成のタイプをつけ加えることになった。国家的機構を背景とした中樞機能をもつ都市すなわちメトロポリスの形成は、産業革命前からの別途の発達系統によるが、産業革命後の要素がその発達を急激に促進したことはもちろんであり、ヨーロッパ各都市のみならず、日本においても江戸の発達と東京の成立過程にこれをみることができ¹²⁾。一方、歴史的系譜とは無関係に勃興した生産都市は、最もこの時代を特色づけるもので、地域形成における都市機能の、いわばアンシャンレジームの打破という点で、高く評価されなければならない。第二の都市時代たるゆえんである。

世界史的都市時代と日本的都市時代 しかしながら世界史的にみると、前記の第二の都市時代はむしろ第三の都市

時代である。なんとすれば、古代の都市革命は第一の都市時代をつくり、中世自由都市簇生が第二の都市時代をつくと思えるからである。前者は乾燥的都市系列であり、後者は湿潤的都市系列である。さらにいえば、後者の傾向の代表的な北西ヨーロッパでは、都市国家的な第一の都市時代をもたないのであるから、ここではこれが第一の都市時代であり、裏返していえば、乾燥系列の第一の都市時代と湿潤系列の第一の都市時代とは内容がことなるのである。

一方、中世自由都市の未発達地域では、あるいは第一の都市時代後の都市沈滞期であるか（中国ことに華北、インドなどにみられる東方アジアの乾燥系列、ここでは国家的都市と特定交易都市が卓絶するが、都市層は薄弱）、あるいは第一の都市時代の出現をみないままに都市卓越の傾向をとくにみることはない（たとえば日本、少数海港交易都市の活況と都市層の貧弱なことはアジア的系列の通有性）時代を経過する。日本にあつて近世都市の成立までとくに都市時代的風潮をつくりえなかつた点は、大きく東方アジア系列のなかにありながらも、独自の展開をみせたことを示している。

現代的都市問題によって論議さるべき現代的都市時代の到来 これまでに概観してきたごとく、各地域、各時代における都市機構とその地域形成上の意義とは、それぞれ特有な個性のうえに成りたち、かならずしも単純な系列下におけることは妥当でないようである。しかしこの考えは、すくなくとも都市地域の類型（区分）の基盤としての概念を与えるという点で意味がある。二〇世紀の今日、ヨーロッパ的とアジア的と、その他各種の歴史的系譜による都市系列も、文化圏の交流の進展につれて合流点に近づきつつある。植民都市という発生的カテゴリーも、ナショナルリズムの興隆とともに移植文化からの離脱を志し、社会主義社会の成立が工業コンビナートを中軸とする社会主義的都市を誕

生させるなど、現代的都市化のあらたな問題をそれぞれの従来の系列とは別個に発生させており、一方において、巨大都市のとどまることなき膨張が、近郊の、衛星都市の、ニュータウンの、コナーベーションの、さてはメガロポリスの、まさに市民的の問題の解決を迫らせている。いまや、広域圏都市の構想が生産と消費文化の適正配置のうゑに論ぜられ、地域形成は地域経済開発（すなわち地域開発）として理解される。世界的にみても、まさしく新都市時代の到来である。

この新都市時代において、世界的にも国内的にも、なお都市発達段階の地域差が認められる。たとえば、アジア・アフリカ諸国の植民都市系列下の地域では、その近代化を工業化によって律せんとする工業化都市時代を迎えようとしており、この段階をすでに経過した地域では、大都市問題と工業ならびにその拠点としての都市の再配置に重点がおかれる。以上のような「都市段階（時期）の差を史的系列のなかで理解する」こと、ここでは日本都市の地域的意義における系列——その特異性を世界史の流れのなかで認識すること、これは都市の歴史地理学の任務である。

註(1) もっとも、起伏の低い場合にもこの考えはあてはまるし、この語をそのまま使うことが可能であるが、(つまり負の都市時代)、この場合には、都市以外の要素たとえば原始文化とか農村とかの規定する率が大であるから、概念統一を強調するとき以外には、影響力の大きいとみられる他の要素の名を冠した名称を用いるほうが妥当である。

(2) 時期すなわち *stage* であって、段階とおきかえてもこの理論は成りたつ。その場合は、都市時代は都市発達段階と考えればよい。

(3) たとえば大化改新以後、大津京(六六七)、藤原京(六九四年)、平城京(七一〇年)、恭仁京(七四一年)、難波京(七四四年)、翌年平城京に復す)、長岡京(七八四年)、平安京(七九四年)。

(4) 兵庫、難波、住吉、堺などは、当時首都の外港たる機能をもった。これらの外港は首都の移動にもなつて中心港の役割をゆずりあっている。奈良にたいしては難波・住吉、京都にたいしては兵庫・難波、吉野にたいしては堺と、それぞれ外

港の中心が移動する。

- (5) これについては、拙稿『播磨期の近代都市』地理調査所時報18)、『前近代社会における日本の人口配分その資料 人口密度』(同時報19)、ならびに「日本地名事典」①(朝倉書店)日本総説中の拙稿『集落と都市』を参照されたい。
- (6) この項は、日本地理学会一九六一年秋季大会に筆者発表の『地域形成における地方都市の問題点』に関連しており、日本における都市化の史的展望については、一九五九年度同学会秋季学術大会都市化シンポジウムにおいて要旨を発表した。また、一九五七年国際地理学会でも、その主旨に触れたことがある。
- (7) このような観点に立って地域区分を考えると、筆者はこれを都市地域と称する。すなわち、都市地域とは都市によって規定される地域である。なお、生産部門であるがこれと同様の考え方は、工業地域についてもいうことができる。工業地域については、「新世界地理」(朝倉書店)第一巻世界総説中の拙稿『工業区』を参照されたい。
- (8) G・チャイルド著 ねず・まさし訳『文明の起源』(岩波新書)第七章都市革命。
- (9) 「世界」という歴史的概念は一個の歴史的生成物であるが、同時に一個の地理的概念であり、さらにまた一個の地域的單元でもある。つまり筆者は、歴史という「世界」は地理という「地域」とまったく同質の概念であると考える。地理学では、環境、その自然、人文の両面にわたる諸条件に即して考察するという固有の分野を没却しえないところから、地域なる概念は一個のアンサンブル、あるいはハーモニー(いずれも調和の世界)として把握される。かのフンボルトの「コスモス」、ヴィダルドウラブラーシユの「地的渾一」などの概念は、究極するところ、すべてこれ同一の概念といえる。筆者編著「日本の土地利用」地方編(1)(古今書院)『序章土地利用の地理的理論』参照。
- (10) プエブロインディアン(インディアンの防衛的原初集落)に端を発したとみられるアメリカ古代の都市文化は、焼畑を基盤とした都市国家であった。マヤ(その密林地域における系列には疑念を残す)では自滅してしましたが、初期インカの都市国家から後期帝国への移行は、まさにローマの再現である。
- (11) Grid(市)ceFaylor: Urban Geography—A Study of Site, Evolution, Pattern and Classification in Villages Towns and Cities. Chapter VII: Evolution of Classical Greek Towns. 以下は、軍事基地設置の必要から基盤巨型(Chessboard Pattern)の都市が多数建設された。後期の Thebes. アンナトリアの Pergamum は、ギリシア末期におけるこの好例である。
- (12) 拙稿『江戸の歴史と東京の地域構造』日本地誌ゼミナール(1)「日本と東京」(大明堂)